



「書評と舞踊評」

ブルーストのことなど持ち出すと話は大上段になってしまうけれども、二〇世紀の小説にはそれ自体が文芸批評でもあるものが多い。文学界七月号の『批評としての書評とポトラッチ的書評』（坪内祐三）はそこまで突っ込んだ内容ではないものの、書評の問題がいろんな側面から洗い出されていて考えさせられる。

出版業界の営業活動や情実がらみのものから厳しい批評精神に裏打ちされた真剣勝負まで、一口に書評といってもその中味の濃さはじつにさまざまだ。昭和二十年代には、錚々たるメンバーが激論を交わしたあげくに筆者名なしの共同責任で活字にしたこともあったとか。大江健三郎の小説を平野謙が読みちがえて書評の筆を折ったというエピソードなど読んでいてドキドキする。

「書評も文学の一分野を占め得るように」という件りとか、忠実なダイジェストであるべきかエッセイとして面白いものかという問題など、意見の別れるところだろう。

私は最近舞踊について書くことが多いので、書評と舞踊評とを比較してしまうのだが、業界がらみの問題は似たようなものでも、まったく違う面もある。たとえば書評が文学であるべきだというなら、舞踊評は文学であるべきなのか、それとも舞踊であるべきなのか。文章作品としての読み応えと舞踊に対する判断ではどちらが大切なのだろう。

言葉でどこまで舞踊を語りうるかというのが、私が舞踊について書き始めたときの課題はだったが、やっぱりそれがいちばん難しい。



「書評と舞踊評」

《追記》

ポトラッチというのは、私もよく知らなかったが、北大西洋岸のアメリカインディアンの儀礼とのことで、要するに社会的な要因でやり取りされる形骸化した贈与らしい。豪華な物が贈られるが、重要なのは物自体ではなく背後にある世間的な事情だ。

これを批評で言えば、贈与なのだから当然のこと耳に快い褒め言葉でなければならず、その裏に世間の事情つまり権威やビジネスがある。

そういえば、舞踊評を書き始めた頃、ある大先輩の舞踊批評家が「ほんとうのことが書ければいいんですけどね」と言うのを聞いて呆れたものだが、今は黙って内心うなづくばかりである。批評はコマージュの一種だと割り切ればいいのだろうが、それにもちよつと抵抗がある。

本文初出：毎日新聞「マガジンラック」二〇〇〇年六月
ホームページ掲載：二〇二二年一月

「書評と舞踊評」

